
カンピオーネ！～王道を進みし鋼の武王～

ポテチブロックリー味

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カンピオーネー！王道を進みし鋼の武王！

【Nコード】

N2084W

【作者名】

ポテチブロッコリー味

【あらすじ】

カンピオーネー！と真・恋姫十無双まさかのクロスオーバー！？

真・恋姫十無双で英雄となったオリ主が神殺しになり、国を建国して早千八百年。
隠居して妻達と静かに暮らしていたが暇という理由でまた表舞台に立つことにした我らが主人公は何をするのか？

プロローグ（前書き）

ISのストックが無くなりモチベーションも低下してしまった今日この頃、朝何故か走っていた作者を思った。

「そうだ。カンピオーネ！の二次を書こう」
無謀にも二作品目。

駄目作者ですが読んでくれると幸いです。

プロローグ

【中華四国連合、軍部総帥曹霊からの蘇りし神殺しの報告書】

我らが王……………武王曹仁が中華四国連合国首都の洛陽にて曹仁様を
崇める神殿に突如降臨……………いや、帰還なされた。

我々曹一族、劉一族、孫一族は曹仁様を崇め、従い、死の果てまで
曹仁様ついていくことをここに誓おう。

各国の魔術結社共よ。

我々は曹仁様に仇なす者を葬ろう。

貴様等が曹仁様に仇なすと言うなら我等は世界を敵にしても構わな
い。

我々は心身共に既に曹仁様のもの。曹仁様の為に死ねるならそれも
本望。

我等らが命、滅びのそのときまで曹仁様と共にツツ！！！！

【グリニッジの賢人議会により作成された、曹仁についての調査書】
彼が何の神を殺して神殺しになったのかは不明。しかし曹仁本人か
ら自らの権能は八つだと進言されたがその真意は定かではない。
この八つの権能の内完全に確認されたのは四つである。

先ず一つ目の権能『五行を統べる龍王』は中国の神獣黄龍を殺害して篡奪したと思われる。

黄龍は四神の長であり、四神が東西南北を守護しているのに対して中央を守護している守護神である。また黄龍は四竜の長、応竜と同一視されており応竜が年老いて黄龍になるとも言われている。

姿は黄金の鱗を持ち、空を覆う巨大な蛇のような姿とされており、五行の土行を司る神獣である。

二つ目の権能『王の財宝』は殺害した神は不明だがその力は絶大である。あらゆる神話に登場する武器を有しており、数え切れない武器を射出することで一人で万の軍勢を滅ぼすことも可能だと考えられる。

三つ目の権能『憤怒の獣王』も殺害した神は不明である。

力を行使用すると姿が変わるが圧倒的な身体能力を底上げし、腕の一振りですら暴風を起し、咆哮は周辺のもの全てを吹き飛ばす。

遠距離戦最強の『王の財宝』と組み合わせることでおそらく現存する全ての神殺しの中でも接近戦においては上位に入る権能になると思われる。

四つ目の権能『守護せし三魔獣』は魔獣の形状から古代バビロニア神話の女神ティアマトを殺害したと思われる。ティアマトは古代メソポタミア神話における神々の母であり、原初の女神である。

その姿は女神でありながら巨大な竜でもあると言われている。

母なる女神ティアマトは三体の魔物を生み出し自らの守護を命じた。

ティアマトは伴侶のアプスーに自らが生んだ子達を殺すように進言されるがティアマトはそれを拒み逆に自分の息子達にアプスーの言動等を伝え息子達によってアプスーは殺されてしまう。

息子達に神々の主を降りるように願われるがティアマトはそれに激怒し、神々と戦いになる。

ティアマトは絶大の力を有していたがエアの息子マルドクに敗れ二つに引き裂かれ一方は天に一方は地に変えられた。こうして母なる神ティアマトは世界の基となった。

こうして母なる神ティアマトは世界の基となった。

以上の四つの権能は確認されているが他の四つの権能は確認されていない。

確認されてはいないが彼の一つの権能は死を操る権能だと予想されている。

完全に確認はされていないが彼の側で度々四神隊の隊長の紀霊、高順、呂布、関忠に暗殺部隊『絶』の隊長関平等、多数の彼の妻達や彼の愛人等の目撃情報がある。

これら四つの権能だけでも彼は現存するカンピオーネ達が所有する

権能を凌駕する力を有しており、全てのカンピオーネよりも絶対的
権威を獲得している。

【中国英雄伝―曹仁龍閣の項より抜粋】

国名は漢と呼ばれていたこの国は中華四国連合国になるまでは女尊
男卑が激しい国だった。

そんな世に生を受けた曹仁は男でありながら文武共に圧倒的な才覚
を魅せた。

彼が年が十二のとき両親に頼み込み旅に出る。この時両親から旅の
為と漆黒の軍馬を貰いつける。これが後に神馬と呼ばれる『月夜』
と曹仁の出逢いである。

曹仁は旅を続けることに官僚等の腐敗により乱世の世がくることを
この時点で予測していた。

旅を続けるうちに彼は紀霊、高順、呂布、関忠、関平等と出逢い彼
女達に忠誠を誓われ共に旅をすることになる。

旅を終え両親が領主をしている地に帰ると領民に歓声と共に迎えら
れる。彼等は知らなかったが旅を続けて賊を討伐しているうちにと
ても有名になっていた。

曹仁が帰ってきたことにより両親は引退し、曹仁が新たな領主にな
った。

数々の賊を討伐し、彼等の領地が広く豊かな地になったとき、霊帝
の死により群雄割拠の世が来てしまい、曹仁の領地は豊かで合った

が為に近隣の領主達に狙われるが彼が自ら鍛え上げた部隊、四神隊と軍師により全ての敵軍は戦滅または吸収していき曹仁の国は大きくなり国名を『中』と改める。

その圧倒的な武力から曹仁は勝利の王、武王、英雄王等数々の異名を持っていた。

曹仁は反董卓連合軍が立ち上げられたとき、袁紹の要請を断り董卓側に付いた。

従姉妹の曹操や旅の途中に出会った劉備、曹仁に命を救われ貸しのある孫堅など彼を慕う者達は集って彼を信じて董卓連合軍を結成させる。

数の利は袁紹軍に合ったが将、兵の質から徐々に押された袁紹軍は曹仁軍に敗北した。

この時女尊男卑が当たり前だと考えていた将や女兵は曹仁を見ることよってその考えを改める。

この戦の終結後、董卓は曹仁に降り曹仁が洛陽にて劉弁、劉協の守護と共に洛陽を治めることになる。

曹操は自らの覇道を叶える為に袁紹軍を下し、劉備軍を攻めたが劉備達は蜀に逃げのびた。

その後曹操は呉を攻めたが元賊の部下が手柄欲しさに孫策を暗殺しようとしたが孫策の母孫堅が孫策を庇い、毒矢をつける。孫策は敵の兵士を殺害し、兵士の死体を曹操の前に突き出す。

曹操は激怒し暗殺を企てた兵士を斬首した後撤退。曹操は撤退時に敵軍への攻撃を禁止したため多大な被害を出したが曹操は撤退に成功した。

毒が廻り死の一步手前の孫堅だったが偶然呉に訪ねようとして来た曹仁が道に迷い孫策達に逢う。孫姉妹が涙を流しながら曹仁に助けを求めたため、曹仁は常に持っていた秘薬を孫堅に飲ませ助ける。この時一刻も争う事態だったため口移しで秘薬を飲ませたが孫堅の様子が落ち着くと少し問題になった。

この後呉と蜀は同盟を結び曹魏との決戦に挑む。後に『赤壁の戦い』

と呼ばれる激戦の末、蜀呉同盟軍が勝利する。

その後、蜀軍の孔明が計画を劉弁、劉協と三国の王の発案し受理される。計画の内容は曹仁を皇帝にすることで四国連合国を設立させること。

この国では一夫多妻、一妻多夫は当たり前だったので曹仁は特に気にしていなかった為に劉弁、劉協、曹操、劉備、孫策に四国の武将、軍師達を直ぐに妻にした。尚、現代でも四国連合国は一夫多妻、一妻多夫は当たり前である。

この他にも四神隊の隊員達が曹仁を慕っていたため愛人も数多くいたとされる。

これは伝説から神話になりし人の英雄の話。神を殺害しカンピオーネになった数々の異名を持つ王の物語り

オリ設定（前書き）

とりあえず設定だけ更新

ネタバレがあるかも？

オリ設定

名前、曹仁龍閣

真名、真空

身長、186 7 c m

体重、67 5 ?

性別、男

容姿、上の上（ギルガメツシュみたいな感じ）

瞳、真紅色

髪、黄金色の髪をしている。長さは肩にギリギリかからないくらい。髪型は二種類あり、基本は何もしない状態だが魔術結社の上層部等に会いに行く場合はオールバックにしている（ギルガメツシュの二種類の髪型）

体付き

元々武家の生まれな為体をしっかり鍛え上げられている。体は細いが筋肉はついているいわゆる細マッチョ。

性格、俺様気質だが基本的に妻達や友人達には優しく、他人でも本質が悪ではないならしっかりとした対応をするが本質が悪の者にはいっさいの容赦なく雑種扱いで敵対した場合はいっさいの慈悲もない。

服装、戦闘時の服装は恋姫の呂布の服装を男版にし、色を全体的に漆黒にして漆黒の色に背中に月をあしらった模様がはいっている袴を羽織っている。スカーフの色は漆黒色に黄金の龍の模様がはいっている。通常時は黒のライダースーツジャケット等を着ている。

武器、王龍斬月刀。

全長180cmの大太刀で柄の部分は黄金色の装飾がされており、刀身は全体的に漆黒だが刃の部分だけ真紅になっている。

【権能説明】

第一の権能

『五行を統べる龍王』

十二天将勾陣と同一視される四神の長であり守護神黄龍を殺害して篡奪した曹仁の第一の権能。

能力は水行、火行、木行、金行、土行の力を生み出し自在に操ることができ、黄龍の姿にもなれる。基本的に水、火、風、雷、地を使った攻撃が出るが自分が生み出したものではないと操れない。
『五行を統べる龍王』には五行を操る力、龍化の他に四神を眷属として召還する力が合ったが曹仁が黄龍を殺害する際に眷属として召還された四神を紀霊、高順、呂布、関忠が四神の殺害に成功したため四人にその力が譲渡され紀霊、高順、呂布、関忠が曹仁の眷属になった。

第二の権能

『幻想霧雨』

別名『ファントム・ミストラル』

中国神話の兵主神に相当される戦の神、蚩尤から篡奪した権能。高濃度な霧を自在に操りることも発生させることも出来る。霧の中では相手は自分の居場所を感知出来ないが自分はいつでも感知可能の奇襲型の力でもあり、逃走する時もこの力を使うことで相手に自分の居場所を気づかれずに逃走可能。

第三の権能

『死を否定せし者』

中国神話における死を司る死神であり、天の女主人と信仰された女仙である西王母を殺害し篡奪した権能。
常時発動型の権能で名前通り自分自身が不老不死になる。しかし、中国神話における西王母は不老不死を与える者とも言われているので自分が不老不死にしたい者は不老不死に出来るが自らが滅んだとき相手も死んでしまう。

第四の権能

『憤怒の獣王』

別名『ビースト・イーラ』

メソポタミア神話における家畜の守護神であり、ウルク最古の王ギルガメシュの唯一無二の親友エンキドウを殺害して篡奪した権能。力を行使すると身体能力を上げ、圧倒的な力を得るが姿が変わる。姿が変わると無造作に伸ばされた髪が膝上辺りまで伸び、両手両足の爪に犬歯が鋭くなる。他にも直感、本能等の獣の力が上がる。

第五の権能

『王の財宝』

別名『ゲート・オブ・バビロン』

ウルク最古の王であり、偉大な征服王であるギルガメッシュを殺害して篡奪した権能。

ギルガメッシュが旅先で手に入れた宝物庫であり、一度は世界を征服したギルガメッシュの財宝。

バビロンに繋げることで宝具を射出、収納を可能にする。あらゆる英雄を縛る天の鎖も使用可能。

第六の権能

『守護せし三魔獣』

別名『トライデント・ガーディアン』

メソポタミア神話における神々の母であり原初の女神ティアマトを殺害して篡奪した権能。

七岐の大蛇ムシユマツへ、獅子ウガルルム、猛犬ウリディシムを眷属として召還でき操ることが出来る。

この三魔獣はそれぞれ別の力を持っている。ムシユマツへは腐蝕、ウガルルムは破壊、ウリディシムは暴食の力を行使することが可能。

第七の権能

『恐怖すべき暗黒』

別名『バイラヴァ・マハーカラ』

インド神話における三神トリムルティ一体を為し、暴風雨神ルドラと同一視される破壊神シヴァを殺害して篡奪した権能。

能力を行使すると暗黒を自在に操ることが出来、応用で暗黒の竜、狼、鳳凰を創り出すことが出来る。

暗黒に取り込まれたら内部で原型を留めることなく破壊される。

他にもシヴァが使用したと言われている三叉槍トリシューラを呼び出し破壊の限りを尽くすことも可能。

第八の権能

『天帝雷光』

別名『エンペラー・ザ・ボルト』

インド神話の武神インドラと同一の武神帝釈天を殺害し篡奪した権能。力はインドラの武器ヴァジュラを顕現させることで雷を纏い雷

の速度で移動、攻撃ができ、防御に関しては雷を貫く威力のある攻撃をしなければ全て電気分解で相殺してしまう。

某野菜くんみたいな能力がありますけど気にしないでください。

(. . .)

名前、紀霊

真名、白びやく

身長、175.2cm

体重、黒く塗り潰れている

性別、女

容姿、上の上)SHUFFLE!の亜沙みみたいな感じ)

瞳、白銀色

髪、綺麗な純白色の髪をボーイッシュな髪型にしている。

体付き

孫策みたいなワガママボディ。ボン、キュン、ボン

性格、曹仁主上主義者。ボクっ娘で何時も元気娘。楽しいことが大好きないたずらっ娘。

服装、戦闘時は恋姫の夏侯惇の服を呂布の服を足した感じ。スカートの色は白色。通常時はミニスカートにTシャツ等ラフな格好が多い。

武器、白虎鋼雷牙。全長200cmはある巨大な大剣で柄の部分が漆黒の装飾がされており、刀身は全体的に純白だが刃の部分だけは白銀になっている。(モンハンの真滅一門)

備考、白虎の力を使い大剣に雷を纏わすことが可能。又、白虎の姿になることができる。

白虎の姿になった場合全体的に能力が上がり金行の力をより強力に行使可能。

四神隊の一部隊、白虎隊の隊長。

名前、関忠

真名、あきな愛輝奈

身長、176,4cm

体重、黒く塗り潰れている

性別、女

容姿、上の上（関羽を大人っぽくして妖艶にした感じ）

瞳、翡翠色

髪、綺麗で艶やかな黒色の髪が膝下辺りまで伸びておりそれをポニーテールにしている。

体付き

恋姫の関羽と大体同じ体型だが胸に関しては関忠の方が大きい。

性格、曹仁主上主義者。

愛紗と違って真面目ではなく不真面目だが仕事はきちんとこなす。
酒と曹仁が大好きなみんなのお姉さん。

服装、戦闘時は恋姫の関羽と呂布の服を足した感じ。スカーフは翡翠色。通常時は着崩した和服を好んで着る。

武器、青龍双覇刃。全長100cmの双剣で柄は漆黒の装飾がされており、刀身は全体的に白銀だが刃の部分は翡翠色をしている。(モンハンの紅蓮双刃)

備考、青龍の力を使い双剣に風を纏わすことが可能。又、青龍の姿になることができる。青龍の姿になった場合全体的に能力が上がり木行の力をより強力に行使可能。
四神隊の一部隊、青龍隊の隊長。

名前、呂布

真名、恋

身長、180、3cm

体重、黒く塗り潰れている

性別、女

容姿、上の上

瞳、深紅色

髪、深紅の髪を短髪にしている。アホ毛が二本あるのが特徴的。

体付き

出るところは出ており締まるところは締まってる。四神隊の隊長陣では一番控えめな体型だがそれでもスタイルはいい。

性格、曹仁主上主義者。無口で甘えん坊。しかも大食い（原作と同じ）

服装、戦闘時は恋姫の呂布そのまま

通常時は白と同じくミニスカ、Tシャツとラフな格好。

武器、朱雀鳳凰刃。

見た目は方天画戟そのままだが柄の部分が完全に漆黒に染まり、

刃が紅色になっている。

備考、朱雀の力を使い方天画戟に炎を纏わすことが可能。又、朱雀の姿になることができる。朱雀の姿になった場合全体的に能力が上がり火行の力をより強力に行使可能。
四神隊の一部隊、朱雀隊の隊長。

名前、高順

真名、美雪みゆき

身長、177.6cm

体重、黒く塗り潰れている

性別、女

容姿、上の上（生徒会の一存の紅葉知弦みたいな感じ）

瞳、碧色

髪、綺麗な蒼色の髪を腰辺りまで伸ばしている。

体付き

紀霊や関忠以上の胸の持ち主で四神隊の中では一番大きい。
全体的に見てもスタイルはもの凄くいい。

性格、曹仁主上主義者。

四神隊の隊長陣のまとめ役でみんなのお姉さんその2。
Sっ気があるが曹仁に対してはDM。

服装、戦闘時は恋姫の黄忠の服と呂布の服を足した感じ。スカーフは蒼色。通常時は関忠と同じで着崩した和服を着ている。

武器、玄武水響大弓、又は玄武氷穿戦斧。

見た目は巨大な弓（全長200cmぐらい）とバトルアックス（全長200cm）の刃と柄が蒼色になっている感じ。

備考、玄武の力を使い弓矢に水を纏わすことが可能。又、玄武の姿になることができる。玄武の姿になった場合全体的に能力が上がり水行の力をより強力に行使可能。

四神隊の一部隊、玄武隊の隊長。

名前、関平

真名、璃愛^{りあ}

身長、173.9cm

体重、黒く塗り潰れている

性別、女

容姿、上の上（愛紗の表情を恋見たくした感じ）

瞳、紅色

髪、艶やかな漆黒に髪を背中辺りまで伸ばし首の付け根辺りで縛っている。

体付き、恋姫の愛紗と大体同じ。

性格、曹仁主上主義者。

余り喋らず無口に近いが自分の主張等はしっかりやる。仕事はしっかりこなすが仕事が出来ればずっと寝てる。

服装、戦闘時は恋姫の周泰の服と呂布の服を足して全体的に黒にした感じ。スカーフは漆黒色。通常時は黒のワンピース等。

武器、夜天、月光。

全長80cmの剣で両剣の柄の付け根に鎖が付いており、繋がっている。

暗器で暗闇から攻撃出来るように全体的に色が漆黒になっている。

備考、密偵兼工作部隊『絶』の隊長。

名前、孫堅

身長、179.5cm

体重、黒く塗り潰れている

性別、女

容姿、上の上(雪蓮にそっくり)

瞳、空色

髪、膝上まである桃色の髪をポニーテールにして綺麗に纏めてる。

体付き、ボン、キュン、ボン。

大体雪蓮と同じ。

性格、曹仁主上主義者。

孫策とそっくり。

(へたしたら姉妹に見える)

服装、孫策と呂布の服を足して二で割った感じ。

武器、龍灸明王。

全長170cmはある長剣で柄には黄金色の装飾がしてあり刃は白銀に輝いている。

備考、二度も曹仁に命を救われて惚れてしまった。

【中華四国連合国】

中の曹仁を皇帝とした魏、呉、蜀の連合国。

漢の時代は女尊男卑が激しかったが今はそれほどでもない。

現在は曹仁の子孫の曹海が四国連合国の皇帝だが皇帝自体がとてつもなく忙しい役職なので曹海はジャンケンで負けて皇帝になった。

皇帝以外にも政治、商業、軍事のトップがありそれぞれ、曹霊が政治、劉雅が商業、孫閣が軍事を担ってる。

原作開始の200年前に幽世にいることに飽きた曹仁達は地上に戻った。その際曹仁達を崇めていた彼女達は大混乱した。

曹仁達を崇める曹海達は四国連合国のトップ以外にも結社『五嶽聖教』と並ぶ結社『武帝龍教』のトップでもある。

曹仁が羅濠教主と仲がいい為、結社同士の争いはない。

【四神隊】

四神隊は青龍隊、白虎隊、朱雀隊、玄武隊の四つの部隊を総じて言う名称。

一人一人が武将クラスの能力をもっているチート集団。

隊長陣を足して総勢二百人の部隊であり部隊によって違う役割をも

つ。

青龍隊、関忠を隊長とした機動力に特化した部隊。
騎馬は漢時代から代わらないまま英雄の騎馬として神獣になっている。

白虎隊、紀霊を隊長とした突貫力に特化した部隊。
一人一人が一对多の実力に秀でている。

朱雀隊、呂布を隊長とした織滅力に特化した部隊。
一人一人が観察眼に長けていて相手の状態や弱点を瞬時に判断できる。

玄武隊、高順を隊長とした防衛力に特化した部隊。
一人一人が防御力に特化しており、相手に決定打を撃たせないように戦闘が出来る。

【密偵兼工作部隊、通称『絶』】

関平を隊長とした気配遮断に長けた部隊。
暗殺部隊でもある。

一人一人の総合的实力は四神隊程ではないが奇襲等では四神隊の上をいく。

オリ設定（後書き）

真空「ようやく、^{オシ}私の話しが始まったようだな」

作者「何だかんだでこの頃地味に執筆が進んでいるからね」

真空「うむ。その調子で精進するがよい」

作者「了解ッ！」

第一話 武王、旅に出る（前書き）

とりあえずこれで1日1回の投稿も終わりかも）、・・・（

第一話 武王、旅に出る

————この世は不条理だった。

強き者が弱き者を蹂躪し、殺し、犯す。

弱き者が強き者に蹂躪され、殺され、犯される。

そんな日々が当たり前の世だった。

世が群雄割拠の時代になり、各国の領主、太守、城主が自分の私欲の為に動くにつれ、戦は増え、地は荒れ、人が死ぬ。

しかし群雄割拠の時代はある人物の手によって終わりを迎える。

彼の者の名は曹仁、武王、龍王、勝利の王、数々の異名を持ちし鋼の英雄王。

曹仁の軍は数多の戦場を越えて不敗、彼自身が鍛え上げてきた四神隊は不滅。

群雄割拠の時代を終わらし、女尊男卑の世で数多の妻、愛人を侍らせた稀代の英雄曹仁。

彼が皇帝になり数十年、娘に皇位を譲り彼は忽然とその姿を消す。

同時に彼の妻、愛人達も姿を消した。

その後曹仁が何処に行ったかも生死も不明。

中華四国連合国の最大の英雄はこうして表舞台から姿を消した。

「ふむ、行くとするかな」

そう言って豪華な部屋から出ようとするのは黒のライダースーツジヤケットを着た、黄金色の髪的青年。

青年はキョロキョロと周り確認し、そつと窓を開けた。

ダダダダダダッ!!!

ガチャッ!

彼が窓を開けると同時に部屋のドアが開き外からぞろぞろと女性達が入ってきた。

「.....」

「.....」

青年はゆっくりと振り返り部屋に入ってきた女性達を見る。

美女、美少女、美幼女。

部屋に入ってきた女性全員は全身から黒いオーラを出しており、100人中100人全員が綺麗、可愛い、美しいと褒めるであろう容姿を台無しにしている。

無言。どちらも一言も喋ろうとしない。
女性達は青年を視殺せんばかりに睨んでいる。
対して青年は顎に手を添えながら考える素振りを見せている。

「ふむ、お前達^{オレ}我に何かようか？」

「惚けないで兄様。

今から何処に行くきなのか？」

青年を兄と呼び、彼に質問するのは此方も青年と同じ黄金色の髪をもち、中国の民族衣装を着こなす少女が青年を睨みつけながら言う。
青年は少し困ったような表情をしながら口を開く。

33

「確かに此処数百年はまつろわね神に逢う事なくお前達と平和に暮らしていたが我も神殺^{オレ}した。

そろそろこの山奥を出て外の世を見てみたくなったのでな。

此処より東に離れた国、日本に行こうと思うのだが……………お前達も共に行くか？」

青年が喋り終わると女性達の大半が溜め息を吐いて色々諦めた表情になる。

「はあく、真空兄様。

兄様がいなくなったら色々問題になるのよ。

それを分かって言っているの？」

少女に色々言われているのは姓は曹、名は仁、字は龍閣、真名を真空。

中国において現代でも崇められる中国の初代皇帝曹仁である。

真空に喋りかけているのは従姉妹であり、自分の妻の一人である魏の初代霸王曹操、真名を華琳。

真空は華琳の問いに躊躇いもなく答える。

「曹霊達のことか？」

問題ない既に許可は取ってある」

華琳達は真空の言葉に疑問を持ち考える素振りをみせる。少し考えて華琳は昨日逢った曹霊達のことを思い出した。

「そういえば彼女達。

妙に機嫌が良くて、肌の艶がいいと思ったらそういうことだったのね」

華琳は少し不機嫌そうな表情をしながら真空を見据える。

「……………全員が行くのは流石に難しいわね。

此処で誰が兄様に付いていくか決めましょう」

華琳がそう言うと真空以外全員が真剣な表情になる。

「それじゃあ、決めるわよ」

華琳が振り返りそう宣言すると全員が顔を引き締めジャンケンを始めた。

『ジャンケン、ポン』

「ボクの勝ちー！ー！！」

「……………ん、真空。
恋頑張った」

「ふふふ、これで少しの間は私達が真空を独占出来るわね」

「そうね。私達四人で思う存分甘えましょう」

「……………真空。」

私…頑張った……………褒めて…」

熾烈な決闘ジャンケンの末、勝利を掲げるのは真空に仕える武将の中でも最古参の武将であり、真空に次ぐ武力の持ち主である四武将に密偵兼工作部隊『絶』の隊長。

白虎隊の隊長である紀霊、真名を白びやく。

朱雀隊の隊長である呂布、真名を恋れん。

青龍隊の隊長である関忠、真名を愛輝奈あいきな。

玄武隊の隊長である高順、真名を美雪みゆき。

『絶』の隊長である関平、真名を璃愛りあい。

彼女達五人が真空に付いていくことが決定した。

『……………(ブスッ)』

勝利した五人以外は膨れっ面をしながら真空達を睨みつけている。

「そつ気を悪くするな。

お前達は我オレの眷属オレでも在るんだ。

頭に呼びかければ何時でも話せるし、我オレはお前達を召還オレすることだ
つて可能なのを知っているだろう」

「それとこれとでは話が別なのですぞ主」

「そつですよ、お兄さん。

何時でも逢えるだけじゃ風達は満足出来ないんですよ」

「そついうものなのか？」

「そついつものですよ」

ふむつと言って考え始めた真空だが本来の目的を忘れていることに
気づき行動に移す。

「さて、そろそろ行くとするか」

『はい！……！（……ん！）』

真空は窓の側まで近づいていくと言霊を唱え始める。

「ナウマク、サマングダナン、インダラヤ、ソワカ。

我、雷光を纏いし暴風。

天空より飛来せし雷いかすちにして、魔を内に秘めし閃光。

我、悪魔を退け、立ちふさがる者全てを貫かん!!!」

唱え終わると真空の体に白銀の雷光が纏われる。

暴風雨神にして、『鋼』の武神である『インドラ』別名『帝釈天』を殺害し、篡奪した権能の一つである。

真空は永く生きすぎてる為か権能が融合して、一つの権能になり、より強力な権能になってしまっているため扱いには十分気をつけなければいけない。

「……………少し鈍っているな。

王たる我オレがこんな有り様では皆に示しがつかな。

うむ、ついでに感覚も取り戻してくるとしよう。

む？何をしておる五人共。早く我オレの『中』に入らんか」

真空が愛輝奈達に言うと彼女達五人の体が僅かに輝くと粒子になって真空の体内に取り込まれる。

「それでは行ってくる。留守の間頼むぞ」

『いつてらっしや〜い』

ピシヤッ！！！

華琳達が返事をする。真空は一瞬にして消えた。

真空が消えると残った華琳達はぞろぞろと部屋から出ていく。
その場に残ったのは僅かな電気の放流だけ

第一話 武王、旅に出る（後書き）

ちよつと無理矢理感があるけど……

まあ、大丈夫だろう

（．．．）

第二話 武王と太刀の媛巫女（前書き）

恵那はこんな感じでいいのかな？

まあ、とりあえず更新してみました。

第二話 武王と太刀の媛巫女

真空達が日本に来て早数年。

「ふむ、このもんすたーはんたーとやらは実に面白いものだ」

現在真空達は何故か山奥に家を建て快適に過ごしていた。

「ん？そろそろ来る頃だな」

真空がそう呟くと木造のドアがガチャツと開いた。

外から入ってきた少女はキョロキョロと周りを見回し真空を見つけると眩しいぐらいの笑顔を魅せながら真空に近づいてくる。

「王様〜！」

タタタツという擬音が合いそうな走り方をしながらまだ幼い少女が真空に抱きついてきた。

「お〜、今日も来たか恵那よ」

「んこや〜」

真空が少女……………恵那の頭を撫でると恵那は猫のようにゴロゴロしだし、とても可愛らしい表情になる。恵那の様子に真空の頬は自然と緩み優しい表情になる。

「さて、恵那よ。今日は太刀を使った修行だったな」

「うん！恵那ね、王様と同じ武器使って王様みたいに強くなるからね！」

恵那はえへっつと無邪気に笑い、真空の胸に頬摺りしてくる。

「ねえねえ王様」

「ん？どうしたんだ恵那よ」

「ええと……………そのお……………／／／」

天真爛漫の恵那にしては珍しく歯切れが悪く、頬も若干赤くになっている。真空は頭に？マークを出して首を傾げ恵那の言葉を待つ。

「え、恵那が強くなって王様の隣を立つのに相応しくなったら……」

「なったら？」

「え、恵那を王様の王様のお嫁さんにしてくれないかな？／＼／」

真空は恵那の言葉に一瞬キョトンとした表情になるがそれも一瞬ですぐに肩を震わせ高笑いを始めた。

「クハハハハハハッ！！！」

「……………／＼／」

恵那は顔を真っ赤にして真空の腕の中でうずくまっている。

「クククツ、そうか嫁か。我^{オレ}は別に構わんぞ」

「ほ、本当！？王様、う、嘘じゃないよね？」

恵那は期待と不安が混じった表情をしながら真空を見つめて言う。

「我^{オレ}は嘘などつかんぞ」

「じゃあ、約束だからね王様／＼」

「ああ、約束だ恵那よ」

真空のその言葉を聞いて恵那は無邪気なそして美しい笑顔を魅せた。この時真空はまだ恵那が幼い子供という理由で軽い気持ちで約束していたが恵那はこの約束を忘れずに強くなる理由として日々修行を精進してきた。

数年後、真空の常時発動型の権能『死を否定せし者』により真空の周辺は常に霊山以上の聖域化している山奥にある空けた地で現在真空と恵那は互いに得物を持ちそれぞれの構え型で構えている。

「……………」

「……………」

お互いに無言しかしその場はピリピリとした緊張が張り詰めている。

ダアッ！

先に動いたの恵那だった。真空は未だに動かずその場に止まり目を瞑っている。

「やあああああつ！！！」

恵那は跳躍して太刀を上段から振り落とす。対して真空は未だにピクリとも動かない。

着々と太刀が近づいていき真空に当たる瞬間に真空は閉じていた目を開いた。

「ッ!？」

一瞬だった。恵那は空中に投げ出され、得物の太刀は刃の根本から切断された。空中に投げ出された恵那は猫のような柔軟性で容易く地面に着地した。

「いや、やっぱり王様それは理不尽すぎると思うだよね」

「恵那よ。我の本気の一撃を防げるほど達人の域に達している貴様に手加減したら命取りになるだろう」

「いやいや、恵那が達人の域なら王様は何なの。王様が本気になったら太刀筋すら見えないじゃん」

恵那の言つとおり恵那は真空の太刀筋は全くといいほど見えていなかった。

「ふん、恵那。貴様既に心眼だけではなく『真眼』にも目覚めているのだろう」

「あつ、王様にはやっぱり分かっちゃう？
そくだよ。王様に一度聞いた時には出来る分けないうって思ってたけど瞑想しているときに何か出来ちゃった」

てへっ、何ていいながら悪戯っぽく笑う恵那に真空は微笑するが頭の中では恵那の才能に心底驚いている。『真眼』
心眼に目覚めた者の中でも更に才能のある少数の者しか目覚めない
稀少な能力であり、真空達が手ほどこししなければ目覚めることもない
現在に遺る魔眼の一種。

極限まで高めた集中力で相手の視線、気配、殺気を肌で感じ、未来
予知に近い先読みをすることで相手の動きが手に取るように解る。
真空が神々との闘いで覚醒させた魔眼であり瞳に変化がなく自らが
進言しなければ、ばれることのない使い勝手がいい魔眼である。

尚、真空以外に『真眼』に目覚めているのは四神隊の隊長陣に数人
の副隊長達、『絶』の隊長関平、関羽、張飛、趙雲、夏侯惇、楽
進、孫策、張遼と接近戦で力を発揮する者だけであり恵那の才能は
凄まじいと思われる。

「我を誰だオレと**思**っている。武を極め、超越せし中国の英雄王だぞ。
それぐらい出来て当たり前だわ!!!」

わははっと笑う真空に恵那は苦笑し手に持っている折れた太刀を地
面に突き刺す。

「よいしょっどー」

折れた太刀を地面から引き抜くとそこには新品同然の太刀が合った。

「うん、やっぱり便利だね王様の権能」

「我の第一の権能だからな。極めていて当然だ」

現在真空は第一の権能『五行を統べる者』を使用し、ここら一带の『土』『水』『風』を支配し、粉碎、切断したものをすぐに再生出来るようにしていた。
因みに恵那がやったことはその応用である。

「さて、恵那よ。貴様の實力も我の四神隊の隊員達と同等の力を手に入れたな」

「恵那そんなに強くなったの？」

「我が数年間付きつきりで鍛えたんだ。強くならなくては我が困る」
真空は何を言っているという顔をしているが恵那は中国の英雄達と同等の力をもっているということに驚きを隠せない。

「経験に関しては我等には及ばないが『真眼』を開眼させた貴様なら経験に勝るとも劣らない強さがあるだろう」

真空が言い終わると恵那は急に頬を赤らめモジモジでした。

「じゃ、じゃあ恵那は王様のお嫁さんになってもいいの？／／／」

「ん？ああ、あの時の約束か貴様がいいなら我は構わないと言っただろう」

「じゃあ恵那が十六歳になったらお嫁さんに貰ってくれる？／／／」

期待と不安。数年前と同じ表情だが数年前と明らかに違い、可愛らしさはなくなり、美しいと言われる容姿、短かった黒髪は今や艶やかな漆黒の長髪、凹凸の激しい体つきと少女は既に一人の女性へと姿を変えていた。

「恵那よ。我は一度した約束は破らん。恵那が求めるなら我は出来る限りの願いを叶えよう。貴様は既に我にとってそういう存在になっているからな」

「うん／／／」

「我は一度手にした者は絶対に手離さない。我と共に来ると言うなら我が朽ち果てるその時まで貴様は死ぬことが出来ない。それでもいいのか？」

真空は有無を言わせないほど真剣な、そして凄みのある表情で覇気が滲み出ているのを気にせず言い切った。

「うん。ずっと一緒だよ王様。王様の為に付けたこの力も技術も恵那は王様のこと以外には使わない。恵那の全部は王様のものだよ」

恵那が言い終わるとお互いに微笑し、口付けを交わす。

「……………んっ」

口付けを交わすことで真空は第三の権能『死を否定せし者』を発動する。

「あ、ああーッ!?」

恵那の死を否定し、恵那の体を造り替える。老化による死、病気による死、傷による死等、真空は恵那の全ての死を否定する。恵那は体を造り替える為に激しい激痛に耐える。恵那の細い腕は真空の背に回し強く抱き締め、爪を真空の背に食い込ますほどの痛みを必死に耐えていると痛みが和らげてきて段々と気持ちよくなる。

「……………んあっ」

痛みが完全になくなると真空との契約は終わり恵那の体は死の概念を完全に否定したものと変わる。

「……………王様……………」

恵那は頬を赤くしながら真空を優しく抱き締める。対して真空も恵那のことを労るように抱き締める。

「頑張ったな恵那」

「……………うん。これで恵那は王様のもの何だよね」

「ああ、恵那はもう我^{オレ}のものだ」

真空の返答を聞き、恵那は満ち足りた幸せそうな表情で真空を見上げながら抱きつく腕の力を強める。

「さて、恵那よ。そろそろ帰るとしようか」

「……………ん。もう少しこのまま」

甘えてくる恵那に真空は微笑しながら恵那を抱き締める腕の力をほんの少し強めた。

夕暮れの丘で二人の抱き合った姿がその後数分間その場に止まり続けた。

第二話 武王と太刀の媛巫女（後書き）

『真眼』はオリジナルです。

心眼の進化系……………

ついつい妄想が爆発してしまいました。

じゃあ次話投稿までお楽しみに！

第三話 武王と軍神と人間（前書き）

ああ、眠い（――）。

眠いが書き終えたので投稿

（・・・・・）

第三話 武王と軍神と人間

「え？しばらく会えないってどういこと王様！？」

惠那は真空に必死の形相で詰め寄る。

真空は珍しく困り顔で惠那の質問に答える。

「むう、我の中の『鋼』が我が同朋が顕現したと告げておるのでな
同朋に“挨拶”しに行こうかと思ってな」

真空の言葉に惠那は面白そうな玩具を見つけた子供のような表情に
なる。

「……………ねえ、王様。惠那も連れてってよ」

「しかし惠那よ。俗世の穢れが「王様がいれば何も問題ないよ」……
……確かに我がいればそこらの聖域より澱みのない場所を創るのは
容易いが……………」

悪戯っ娘のような表情をしながら惠那が真空に抱きついてきた。
真空は諦めた表情をし、惠那を一撫でし、愛輝奈達の方に顔を向け
る。

「お前達はどつする。一緒に来るか？」

愛輝奈達は思案した表情になるがそれもすぐに終わり、真空の質問に答える。

「私は行こうかな？暇だし……………」

「真空が行くならボクも行くよー！」

「……………恋も行く」

「あら、みんな行くのね。なら私も行くわ」

「……………私……………行く……………」

上から愛輝奈、白、恋、美雪、璃愛の順で真空に返事をした。五人の返事を聞き真空はこの後のことを思案し、すぐに実行する。

「それでは行くのでしょうか」

真空がそう言つと家の周りに稲妻が走り電気を放流する。

電気の放流が最高潮になった時、真空は雷撃の権能を行使する。

「ナウマク、サマングボダナン、インダラヤ、ソワカ。

我、雷光を纏いし暴風。

天空より飛来せし雷いかずちにして、魔を内に秘めし閃光。

我、悪魔を退け、立ちふさがる者全てを貫かん!!!」

ピシヤツツツツツツアア!!!

轟音と共に巨大な稲妻が走るとその場には何も残されていなかった。

ピシヤツツツツツツアア!!!

とあるイタリアの山奥に巨大な稲妻が落ちる。

ゴオオオオオオオオオオオンツ！！！！

轟音と共に木造の家が出現する。

ガチャッ

「うむ、成功だな」

ドアを開け、外を確認し権能の行使が成功したことに満足そうに頷く真空。

他の者はどうかと後ろを向くと何時も通りの愛輝奈達と目を回して気絶している恵那の姿が目に入った。

「ああ、恵那は初めてだったな」

真空はやってしまったという表情になるがそれも一瞬で普段の表情に戻り恵那なら大丈夫だろうと言って外に行こうとする。

「あら、何処に行くのかしら真空」

「しばらく“散歩”に行ってくる」

「分かったわ。恵那には私から言っとくわ」

美雪との会話を終えると真空は雷光となり一瞬でその場を後にした。

ピシャッ！

雷光を解除し、イタリアの地に降り立った真空はとりあえずそこから歩くことにした。

「さて何処から探したものが」

歩いている内に町についた真空は頭の中で思案しつつ、町中の街道を歩いていた。

チラッ、チラッ

色々な場所から視線を感じ、辺りを見回すが誰も見ていない。真空は気のせいかと言いつつ、また歩き始める。

真空は気付いていないがライダージャケットと赤いワイシャツに身を着けた真空はその容姿とマッチして、もの凄く似合っており街道を歩く女性達の視線を釘付けにしていた。

その後真空は気の向くままにあちこちと歩き回った。

気付くと既に夕暮れになっており真空はとりあえず家に帰ることにした。

「我、雷光を纏いし暴風！……！」

一瞬で白き雷いかずちを纏った真空は夕暮れの空に向かって飛んだ。

ピクッ

「現存する最古の神殺し、鋼の武神、千の英雄を従えし皇帝……

……こんな時に霊視だと？

……まさかこの地に彼の者が顕れたとでもいうのか？」

ベッドに横になりながら人知れず呟く女性……ルクレチア・

ゾラは額に冷や汗を垂らしながら先程この家に訪れた草薙護堂とエリカ・ブランデッリのことを案じた。

「あの二人には少々気の毒なことをしてしまったかな」

彼女にしては珍しく真剣な顔で窓の外から見える夕暮れを見つめた。

「武神、軍神、闘神、戦神、鬼神、あらゆる戦の神々の生まれ変わりと言われた中国の皇帝にして最凶の英雄王……………あの二人が彼の者に出逢わなければいいが……………」

言いを終えるとルクレチアは静かに溜め息を吐いた。

「ぶすっ……………」

膨れっ面でかれこれ十分は睨みつけている恵那に真空は辟易していた。

「恵那よ。そろそろ機嫌を直してくれないか？」

真空は困ったように恵那に言うが当の本人はプイツと顔を逸らしてしまった。

恵那は自分を置いてさっさとイタリアに観光？しに行った真空に怒って先程からこの調子である。

愛輝奈達はこの様子を椅子に座りながら苦笑している。

（（私達も昔は恵那と同じことやったな）（））

愛輝奈、白、美雪は恵那と同じ経験があるため懐かしんでいる。

真空は仕方がないと言いつつ最終手段を使う。

「恵那よ、今日は悪かった。

許せとは言わんが同朋との一件が終わったら詫びに一日中恵那のいうことをきいてやるっ！」

何故か上から目線で言い放つ真空だが恵那はそんなことお構いなしに過剰に反応する。

「本当、王様！？

約束だかね、破ったら許さないからね！」

すぐさま機嫌を直した恵那は笑顔で真空に近づき、抱き付いた。

「ん〜王様」

真空の胸に抱き付いて甘えてくる恵那に真空は微笑して恵那の頭を撫でる。

「」

更に機嫌が良くなった恵那を撫でつつ真空と同朋の神力を探っていく。

（ふむ、数ヶ所神力があるのは見つけたが、どれが同朋のものは検討がつかんな）

真空はそこで神力を探るのを止め恵那を撫でるのに集中する。撫でるのに集中力があるのかはわからないが……………

（まあいい、虱潰しに探せば何れ見つかる）

頭の中でそう言いつつ真空は不適に笑った。

第三話 武王と軍神と人間（後書き）

真空って神殺しだけど鋼の性質をもつ英雄だからまつろわぬ神と似たような存在なんですよね。

神殺しかまつろわぬ神。どちらかというとなんか神殺しに近いですね。

さて、次の投稿はいつになるやら……………

第四話 武王と軍神と人間 其の二（前書き）

んゝ恋姫のキャラがなかなか出せない。

どうしたものか……

第四話 武王と軍神と人間 其の二

現在真空は第一の権能『五行を統べる者』を行使して朱雀と成った恋の上で恵那と共に乗り、眼下に見える神獣を見ていた。

「む、何だあれは？」

『白馬』の神獣が青い焰？に包まれていつている。焰？は30秒ほどして『白馬』と共に消えた。

「うわーやっぱり神様の戦いは規模が違うね」

隣で真下を覗き込んで、驚いている恵那に苦笑しつつ、眼下の戦いを楽しむことにした。

「ねえねえ、王様。

王様はあの神様達とは戦わないの？」

「我オレは弱っている神をいたぶり殺すほど無粋ではない。まあ、あの神々が全快の状態ならば殺り合いたいがな」

真空は恵那にそう言いつつ、眼下に佇む軍神ウルスラグナを見下ろす。

「くくくっ、奴め、^{オレ}私の存在を気付いておりながらもあえて無視するか！」

クハハハと面白そうに笑う真空は恵那の肩を抱きつつ、もう一度軍神ウルスラグナを見る。

「ならば僅かな間、楽しませてもらおうか！」

その頃、真空の存在に気付き、あえて無視したウルスラグナは『強風』の化身となり、空を飛んでいる。

(まさか同朋たる『鋼』が此処まで来るとは)

ウルスラグナはメルカルト王が居る場所へと向かいながら先の気配を感じた天へと眼を向けた。

曹仁は不敗の王であり、自分と同じ勝利の英雄で合ったためか一度見つけたら何処に居るかすぐわかるようになっていた為、一瞬で見つけることができた。

(まあ、何もしなければ我は気にすることはないがな)

ウルスラグナはそう結論付けると再び視線をメルカルト王が居るで在ろう場所へと向けて、飛びさった。

数時間後、夜が明けて日が射し始めた頃、真空の眼下には奇跡を成

『……………まさか、貴様がこのような地までくるとはッ!』

「あら私の可愛い真空ちゃん!

あたしに逢いにわざわざ此処まで来てくれたのね!」

「ほう、やはり我の同朋だったか」

メルカルト王は忌々しそうにパンドラは嬉しそうにウルスラグナは面白そうにと様々な感情を浮かべている。

「くくく、こ奴が新たな神殺しか。

何も知らぬただの人がよく此処までこれたものだ」

くくくと面白そうに笑う真空。

彼の背中にはパンドラが抱きついてパンドラが真空にぶら下がる形で真空の肩に顔を置いている。

「ふふつ、さあ皆様、祝福と憎悪をこの子に与えて頂戴!

七人目の神殺し——最も若き魔王となる運命を得た子に、聖なる言霊を捧げて頂戴!」

「クハハハッ、新たな神殺しよ。

貴様に同朋として祝福を与えようではないか！」

『ぬかせ、魔女め！』

貴様の新たな落とし子など、すぐに葬ってくれるわ！』

「ふ、よからう。

ならば草薙護堂よ、神殺しの王として新生を遂げるおぬしに祝福を
与えようではないか！

おぬしは我の――勝利の神の権能を篡奪する最初の神殺しじゃ！
何人よりも強くあれ。ふたたび我と戦う日まで、何人にも負けぬ身
であれ！」

真空の眼下では黄金色の髪の毛の美少女が新たな神殺しの少年の元に足をひきずりながら遺跡のなかへとやってきた。彼の『真眼』はあらゆる障害物すら無意味であり、遺跡のなかにも容易に確認出来る。

「ふふつ、そろそろあたしも帰るかな」

未だに真空の背に引っ付いているパンドラは真空に頼りながらそう言い放った。

「む、帰るのか義母よ？」

「ええ、何時までもこっちの世界にいても出来ないしね」

「そうか。ならば私も帰るとしよう」

真空は手で朱雀（恋）の背中を撫でると朱雀（恋）は進行方向を愛輝奈達が待つ我が家へと変える。

「じゃあ、あたしも帰るわ。」

偶には真空ちゃんもあたしのところに顔を見せに来なさいよ」

「わかつている義母ははよ。
また何時か逢いに行く」

真空の言葉に満足したのかパンドラは気付いたら何時の間にか消えていた。

「…ん……うん……」

パンドラがいなくなると恵那が目覚め始める。

パンドラは基本的にカンピオーネ達とまつろわぬ神以外には顔を見せないのだ。

「一日留守にしてみましたからな。」

心配かけるのも忍びないからさっさと帰ることにするぞ」

真空の言葉に朱雀（恋）は一吼えすると飛行速度をさらに上げた。

最も若き魔王と現存する最古の武王の最初の邂逅は此処で幕を閉じる。

第四話 武王と軍神と人間 其の二（後書き）

パンドラの口調はこんな感じでいいのかな？

まあ、反省はするが後悔はない！

第五話 武王と女神（前書き）

女神登場！

第五話 武王と女神

新しき魔王が誕生してから月日がながれた。

現在真空は霊山の奥底に建てた木造の家のバルコニーでお茶を飲んでいた。

「ズズウ〜……………」ふむ、日本の茶もなかなか美味しいな」

「王様。人はそれを現実逃避って言うだよ」

恵那が差し入れに持ってきた茶を飲みながら真空は黄昏てた。

そう、真空は今非常に困っている。

武を超越せし武王、中国最大の英雄王、龍神の化身等様々な二つ名がある彼が、弱点が一つも無いと云われた真空が困るほどの理由――それは

「ふむ、曹仁よ。妾のものにならんか？」

数百年ぶりに再会した女神……………アテナに自分のものになれ宣言をされてしまった。

まつろわぬ神と神殺し。

出会いはやはり殺し合いから始まり。

生きる鋼の英雄である真空とは幾多も刃を交わした仲でもある。

その末に気に入られるだけならよかったがこの女神様は自分のもの

になれと言っ。

今まで真空は女性の方から近づいて来て、女性の方から関係を持ち掛けてきたためこんなことを言われたのは初めてである。

言葉より行動をそれが真空の妻達と愛人達の出した結論である。大一に真空は王で合ったためそんなことを言う女性自体が居なかった。

その結果、真空にしては珍しく困惑している。

「ダメだよアテナ様。

王様はみんなのものなんだから」

恵那も珍しく真剣な顔でアテナに言っている。

西洋最大の女神の一柱であるアテナに普通はこんな言い方は出来ないが恵那は既に真空の眷属であるため女神とも多少は闘える身体にはなっていた。

「少し黙るがいい巫女よ。妾は今曹仁と話しているのだ。

貴女程度の者が妾と曹仁の話しの途中に横やりを入れるなど無粋であるぞ」

アテナは不機嫌顔を隠そうともせず恵那に向けながら言っ。

「恵那は王様の女で眷属なんだよ？

それぐらい言ってもいいと想っただけだよ」

「妾には関係ないことよ。
英雄、色を好む。当然のことだ。
しかし、妾は女神でそなたは人の子、妾の立場が上なのは当然である」

アテナの物言いにむうくと唸る恵那だが隣の真空を見て悪戯を思いついたような顔になる。
恵那はアテナに意趣返しをするため現在の自分と真空の関係をアテナに見せつけることにした。

「王様」

だきっ

「む？どうかしたのか恵那よ」

「ん、別に何でもないよ王様」

真空の胸板に頬摺りしながら恵那はチラッとアテナを盗み見る。
アテナは額に青筋をたて、視殺せんばかりに恵那を睨みつけている。

「……………巫女よ。あまり調子に乗るでない。」

この場に曹仁が居なければ妾の力をもってそなたを八つ裂きにして

くれたものを……………」

物騒なことを口走るアテナだが恵那を殺すことなど不可能だと理解している。

恵那や真空と契約した者達は死ぬことが赦されない。

契約した時から一種の呪縛が掛かっており、真空が死ぬまでは決して死ぬことは赦されない。

しかし恵那達はそういった呪いの他に真空から贈られてくる武神の加護が在るため身体能力、氣等が上昇し、心眼を手に入れることが出来る。

それ以前に恵那達は真空の側に居続けたいと願っていたため後悔は一切ない。

つまり真空と契約した者は圧倒的な力を手に入れることが出来るが不老不死という呪いが掛かるということである。

「恵那はアテナ様とは違って王様との間に絆が在るんだよ？」

立場なんて恵那には関係ない、恵那は王様の側に居ればそれでいいんだから」

恵那は真剣に言っているつもりだが真空の胸板に頬摺りしながらにやけた顔で言っているため全て台無しである。

「……………」

しかしアテナには恵那の言ったことが嘘偽りのない言葉ということ

が解ったため黙ってしまった。
しかしそれも一瞬のことでアテナはすぐに口を開く。

「……………巫女よ。そなたの想いは理解した。
しかし妾は諦めるつもりはない。
今は不可能のようだが何れ曹仁を妾のものにしてみせる」

アテナは立ち上がりバルコニーの階段のところまで歩いていき一度立ち止まり真空達の方に向き直った。

「巫女……………いや恵那よ。」

「何？アテナ様」

「そなたに気付かされたことは癪だが感謝しよう。
しばらくの間、妾は『蛇』を取り戻すことに専念する。
『蛇』を取り戻した暁には曹仁、貴方の元に再び来るとしよう」

そう言ったアテナは階段から降りてどこかへと消えてしまった。

鋼の武王と最古の女神、お互いが敵同士で在りながら女神は鋼の武王に惚れてしまった。

忌むべき存在を愛してしまった女神はこれからイタリアの地へと向かう。

新しき魔王と最古の女神の邂逅は違う結果をもたらすだろう。

第五話 武王と女神（後書き）

カンピオーネ！の十巻見て思いついたけど真空の円卓ならこんな感じかな。

曹仁（真空）、関忠（愛輝奈）、紀霊（白）、呂布（恋）、高順（美雪）、関平（璃愛）、曹操（華琳）、孫策（雪蓮）、劉備（桃香）、関羽（愛紗）、趙雲（星）、夏侯惇（春蘭）、張遼（霞）かな

少しネタバレすると桃香なんかは戦闘能力がそこまで高くないけど中国の民等の信仰で半まつろわぬ神化していると考えているだよね。まつろわぬ神って常識が通用しないからこんなオリジナル設定になっただけど大丈夫かな？

第六話 武王の暇つぶし（前書き）

テストがそろそろあるから勉強しなければ……………

なんて言うと思ったかッッ!!!!!!!!!!

第六話 武王の暇つぶし

アテナが何処かへと消えてしまつてから1ヶ月。

イタリアから日本に帰つてきて更に数週間、現在、真空達は……

……

「暇だな……………」

「暇だね」

「暇」

「……………暇」

「暇ね」

「……………暇」

だらけていた。

ここ最近では恵那が来て居なく恵那の修行も出来ないなので暇を持て余す毎日を過ごしている。

何故、恵那が此処に居ないのかというとは清秋院家の現当主である恵那の祖母に呼び戻されたからだ。

しばらく会えないととても落ち込んでいた恵那を慰めたのは真空の新しい記憶だ。

「…………アテナが居る場所にも行くとするか」

真空はこのあまりにも退屈な空間に耐えかね2ヶ月近く逢ってない女神の元へと行くことにした。

「お前等も行くか？」

「…………行く…………行く…………」

愛輝奈達もこの退屈な空間に耐えかね、真空についてくることにした。

「行くならば、早く我オレの中に入れ」

は〜いと愛輝奈達が返事をする。愛輝奈達は光の粒子となり真空の中へと入っていく。

愛輝奈達が真空の中へと入り終わると真空は家の玄関を開け、外に出る。

「さて、行くとするか…………ナウマク、サマндаボダナン、インダラヤ、ソワカ。

我、雷光を纏いかさちいし暴風。

天空より飛来せし雷いかさちにして、魔を内に秘めし閃光。我、悪魔を退け、

立ちふさがる者全てを貫かん！！！！」

ピシヤツと白銀の雷光を身に纏い、閃光を煌めかせ真空はアテナの元へと向かった。

ザシユツ

アテナはエリカが足止めにと放った六体の獅子を全て葬り去るとピクツと何か来ることを直感し夕日により茜色に染まった空を見る。

ピシヤツ

瞬間、夕日の彼方から雷光が飛来する。

アテナは飛来する者が自分の知る愛しい人と同じことに自然と頬が緩み笑顔になる。

「おお、曹仁よ。妾に逢いに此処まで来たのか？」

「ふむ、そうだな結果的に見ると我はお前に逢いに来た^{オレ}と見ていいだろっ」

真空はアテナの言葉を肯定するとアテナは嬉しそうな顔をし、真空に近づく。

「ふむ、妾に逢いに来たことは素直に喜ばしいことよ。

しかし未だに古の『蛇』……………ゴルゴネイオンは妾の手元にはない。

されば妾は貴方と共にはいれない。

……………もつとも神殺したる貴方が妾に力を貸すとならば話しは別だが」

アテナの物言いにくくくつと面白そうに笑う真空はアテナに顔を向けて更に不適に笑った。

「くくくつ、アテナよ。

我はお前には協力^{オレ}はせん。

しかし我は若き神殺^{オレ}しにも協力^{オレ}はせん」

「ほう、どちらにも手を貸さないというのか？」

「然り。我はお前等の闘いを見て楽しむとしよう」

真空はアテナにそう言つと再び雷光を煌めかせ空の彼方へと消えた。

「……………」

静寂。残されたアテナは周辺の気配を探るが先ほどまで居た真空の気配は全くない。

気配を探るのを止め、周辺をグルツと見回すとアテナは再び自信が求めるゴルゴネイオンの元に行こうとする。

「ふふふつ、曹仁よ。『蛇』を取り戻した暁には貴方を妾のものにしてみせよう」

アテナは最後にそう言葉を残すと移動を始めた。

「我が元に来たれ、勝利のために。
不死の太陽よ、我がために輝ける駿馬を遣わし給え。
駿足にして靈妙なる馬よ、汝の主たる光輪を疾く運べ！」

真空は高層ビルの上で眼下に広がる若き魔王と女神アテナの闘いを
見ていた。

「……………」

何もする事はなくただ見ていた真空だが何者かが近づいてくる気配
を感じ、後ろを見るとビルからビルへと跳躍して近づてくる者がい
た。

「王様——ッ！」

近づいてくる者が1ヶ月ぶりに会う自分のよく知る人物の気配だっ
ため真空はくるで在ろう衝撃に備える。

「王様〜！！！」

ダキッ

走ってきた勢いそのまま恵那は真空の胸目掛けて抱きついてきた。

真空は自分の予想通りな行動をした恵那を優しく抱きしめ微笑した。

「恵那よ。久方ぶりだな」

「うん王様。久しぶりだね！
だいたい1ヶ月ぶり位かな」

久しぶりに会った二人はしばらくの間抱き合ったままだったが恵那がチラッと視線をずらすと桁違いの闘いをしている魔王と女神が目に入った。

「わあ〜、アテナ様も草薙さんも桁違いだね〜」

抱き合ったまま面白そうに恵那が闘いをしている二人を見る。
遙か東の空より天をかこて、超々高熱のフレア飛来させた若き魔王とあらゆる光を遮断する、黒き障壁を展開し、フレアを防ぐアテナ。どちらも異常で規格外なことをしているが恵那には目の前にいる真空の方が異常で規格外だと知っているため大して驚きはしない。

「むっ、草薙とは誰だ恵那よ？」

「本名は草薙護堂。彼処で闘っている魔王様のことだよ」

恵那の言葉に頷いて納得すると真空はアテナと草薙護堂の戦況を分析する。

「ふむ、この闘いアテナの負けだな」

「え、どうして王様？」

疑問に思った恵那が眼下を見ると納得したような顔になる。
真空の持つ数々の武具ほどではないが凄まじい呪力を宿した槍を若き魔王がアテナに向かって投じていた。

「あゝあ。アテナ様丸焦げだね。
大丈夫かな？」

「問題ない。アテナは不死の女神。死ぬことはないだろう」

若き魔王と女神アテナの闘いは若き魔王草薙護堂の勝利で幕を閉じようとしていた。

「……………ここまでか。我は（オレ）は帰るぞ」

「えっ？アテナ様はたすけないの王様」

「此処で死ぬのならばアテナもその程度だったということだ」

そう呟くと真空はアテナ達が居るであろう場所に背を向け歩き出した。

「ふふふっ、本当は心配しているのに素直じゃないな、王様は」

優しく微笑みながら恵那は真空の後を追った。

現在、護堂は非常に困惑していた。

アテナとの闘いに勝利し、勝者の特権としてアテナを日本から出ていけと命令したまでは良かったがその後起こった現象に護堂は困惑していた。

「……………なんだ。この霧は？」

そう霧である。近くで警戒しているエリカと護堂同様に困惑している祐理、眼前で周りを見回すアテナは見えるがそれ以外は霧で確認することすら出来ない。

「ふふふっ、わざわざ向かいに来てくれたのか？」

突然そう呟くアテナに護堂達の視線が自然とアテナに集まる。

『そつだ。お前があまりにも遅いからな。向かいに来てやった』

突如、響くように聴こえる声に護堂、エリカ、祐理の三人は困惑す

る。

「貴方が来てくれるとは妾も初めは驚いたぞ」

『我も初めは行く気はなかったがな。お前が敗北するところを見てしまったからな』

「そうか。ならば妾は次こそ勝利をこの手で掴み取ってみせよう」

淡々と何処かに話し掛けるアテナ。

護堂達はそれをただ見ていることしか出来なかった。

何時何処から敵の攻撃が来るのかと護堂達は周りを警戒しながら神経を研ぎ澄まして気配探るが虫一匹の気配すら探れない。

おそらくはこの霧のせいだろうと結論するが警戒を止めない護堂達。

『そう警戒するな若き魔王よ。我は貴様と事を起こすつもりはない』

「そうか。でっ、あんたはいったい何者だ？」

アテナとの話しを止め、護堂に話し掛ける『声』。

『声』は護堂の問にふむうと考えるがすぐに口を開く。

『そうだな。我のことは《ギル》とでも呼んでくれ』

「ギルさんか。わかった」

『うむ。それでいい。む？時間だ。我はもう行く』

「む、もう行くのか？ならば少しの間待っておれ妾は最後にこ奴言わなければいけないことがある」

護堂と喋っていた『声』はうむと頷いて黙り、アテナは護堂の方に向いた。

「さて、草薙護堂よ。妾はあ奴の元に戻る。貴方と再び相まみえる確率は低いだろう。

しかし再会した時、妾と今一度武を競おうではないか」

「二度とお断りだな」

「ふっ、妾に土をつけた男の名、この胸に刻みつけておく。

「――さらばだ、草薙護堂！」

その言葉を最後にアテナは霧と共に消えた。

第六話 武王の暇つぶし（後書き）

一巻では特に介入する場所がないのでそのままスルーしました。

今月はテストがあるので更新出来るのが今日を足して後一回ぐらいしか出来ないかも………

第七話 武王と若き魔王の邂逅（前書き）

テストが終わったー！

というところで投稿！

第七話 武王と若き魔王の邂逅

あの人と出逢ったのは本当に只の偶然だった。

草薙護堂は珍しく、一人で商店街を歩いていた。

エリカは赤銅黒十字の長であり、エリカの叔父であるパオロ・ブランデッリに喚び出され、祐理は正史編纂委員会に用があると何処かに行き、妹の静花は純粹に部活である。

そのため護堂は暇を持て余し、珍しく一人で商店街を散歩していたところだ。

「……久しぶりに一人なんだが、何時もいる奴が居ないと寂しいもんだな」

自嘲気味に笑い、歩を進めると護堂の瞳に一人の青年が映った。

長すぎず、短すぎない光り輝く黄金の頭髪。

端正に整っている容姿。

何故か異様に似合っているライダースーツジャケットに赤のTシャツ。そんな人物が道中で唸っている。

彼のが気になるのか多数の女性が彼のことをチラチラと見ている。

護堂は道中で唸っている彼が何故か気になり、声をかけた。

「あの、どうかしたんですか？」

青年がこちらに顔を向けたとき護堂は息を呑んだ。

彼が纏う圧倒的な存在感が護堂をそうさせてしまった。

何より絶世の美青年と言われても遜色ない容姿。全てを見通しているような真紅の瞳に捉えられれば誰だって息は呑むに違いない内心そんなことを考える護堂に青年が話し掛ける。

「……………我オレに何か様か？」

「道のと真ん中で唸っていたら誰だって気にすると思うんだが……………」

青年の言葉に反射的に護堂はそう言ってしまった。

言った後に後悔するが言ってしまったものはしょうがなく青年の反応を待つ。

「む。それはすまなかった。
すぐに退く」

そう言って道の端に移動する青年に護堂も続く。

「それでどうしてあんなところで唸っていたんですか？」

「むづ。いやなに、日本ではどのようなものが美味か少々考えていてな」

「え？そんなことぞ？」

「ついつい敬語を忘れて質問してしまう護堂。」

「青年は特に気にした様子はなく護堂の質問に答える。」

「日本に来たのはつい最近なんぞな。」

「日本の食文化というものを知っておこうと思ってな」

「ああ。そういうことですか。
なら家に来ませんか？
食事程度なら出せますけど」

「護堂は何故か彼を放っていくことが出来ず、つい食事の誘いをかけてしまった。」

「なに？それは誠か？」

「いや、嘘なんかつかんぞ俺は」

「ならば世話になろう。

よろしく頼むぞ。

我の名はそうだな。日本風に言つと仁^{おし}だ。
後、敬語はいらん」

「おお、そうか？

なら、遠慮なく。

俺の名前は草薙護堂だ。よろしくな」

護堂にとっては初めてしかし仁にとっては二度目の出逢いであった。

「ふむ。これが和食か」

「まあ、簡単な物だけだけだな」

護堂は簡単な和風の料理を作り、仁のご馳走した。しばらく、静かに料理を頂いていたが仁が何かを思い出したように護堂に話し掛ける。

「そついえば護堂よ。」

お前、家族はどうした？

家には誰も居らぬ様だが」

「ん？ああ、家族ね。」

母親は仕事で祖父は何処かに出掛けて、妹は部活だ」

「むう。挨拶ぐらいはしといた方がいいと思っただんな」

護堂はついつい平和だな〜と想着てしまう。

何時もだと天上天下唯我独尊の金髪美人に絡まれ、説教巫女と口うるさい妹にガミガミ言われるのが日常だったのでこんな平和な日常を求めてしまうのは必然だろう。

「ずずう〜。うむ。やはり日本の茶はなかなかだな」

いつの間にか食事を終えた仁は食後のお茶を楽しんでいる。

護堂も食事を終え、自分の食後のお茶を用意してしばらく仁とお茶を飲みながらたわいもない話しをする。

護堂は日頃溜まる一方の愚痴を言い。

仁は静かにそれを聞き、時々アドバイスをする。

そんなたわいもない話しをしているとガチャツと玄関が開く音が聞こえる。

「ん？誰か来たようだな」

「多分、妹の静花だ。そろそろ部活も終わる時間だからな」

「ただいま〜」

聞こえた声にやっぱり静花だ、と呟き護堂は帰ってきた静花に声をかける。

「おかえり〜静花」

玄関からタツタツと小走りに居間に入って何故か固まった妹に返事をする。

「…………お兄ちゃんが男の人を連れてきている？
そんな、何かの間違いじゃ」

「…………おい、ちょっとまで。それじゃあ、俺が何時もは女性を連れ込んでいるみたいじゃないか!？
違うからな仁!

俺はそんな八方美人じゃない!」

必死に弁解する護堂に仁はふっとシニカルに笑い、護堂に言う。

「女と付き合うならば、責任を持つことだな。
責任が持てんなら、女と付き合う資格はない」

アドバイスをした仁はお茶をずずうと飲み干し、立ち上がる。

「さて、そろそろ行かなければな」

「もう行くのか?」

「ああ。人を待たせているんでな」

玄関まで歩き、靴を履くと仁は振り返り、護堂に顔を向ける。

「護堂よ。我はオレ一食の恩は忘れん。
何れ、恩を返しにくるからな」

「それぐらい別にいいんだけどな」

「……………そうか。
では、また会おう」

「ああ、じゃあな仁」

護堂の家を出て数分間歩き続けると一人の女性が真空に近づく。

「曹仁様」

「む。来たか。ならば報告せよ」

「はっ！つい先程、最古参の魔王ヴオバン侯爵が日本に到来する
という報告が入りました」

「ふむ。そうか。報告ご苦労。お前みたいな優秀な部下達がいることを我は誇りに思うぞ」

「ッ！？勿体なきお言葉。我等は身も心も曹仁様に捧げた身。曹仁様に仕えられることが至高の喜びです」

その言葉に満足そうに頷くと仁……………真空は部下に新たな命令を与える。

「それでは新たな任務を与える。魔王ヴォバンのことを随時報告せよ」

「はっ！全ては曹仁様のために」

シユタツと何処かへと消えた部下が居た場所から視線を外し、真空は空に顔を向け、眺める。

「くくくつ、護堂よ。貴様は他の神殺しと相対したとき、何をみる？」

真空は一言呟くと再び歩き始めた。

第七話 武王と若き魔王の邂逅（後書き）

ハイスクールD×Dとカンピオーネ！

この2つのライトノベルは作者の読んできたラノベの中ではトップ
ランク。

ハイスクールD×Dも書きたくなってきた今日この頃。

第八話 武王と老王（前書き）

リリアナがぶっ壊れた

ちてんぐじしよん？

第八話 武王と老王

ザアアアアアア……

「……………」

雨が強風と共に吹き荒れる空を真空は静かにビルの屋上で佇み、眺める。

不思議と彼に雨粒が触れる瞬間、雨粒は蒸発して消えている。おそらくは権能を行使しているのだろう。

オオオオオオオオオオンンンンツツツ！！

獣の大咆哮が大気を唸らせる。しかし、真空にとってはこの程度、幾度となく聴いてきたもの。

竜神然り。獣王然り。四神、黄竜、エルキドゥ、ティアマト。真空が殺害した代表的な神々を知れば、誰で在ろうと納得するだろう。

「……………ふん。老害が。」

我は受けた恩は忘れん。今から恩は返すぞ。

我が友、草薙護堂よ」

何時も通りの不適な笑みを浮かべ、真空は白き太陽のフレアを喰ら

う大巨狼の元へと跳びだした。

(こりゃ、俺達の負けか)

声には出さず、護堂はひとりごちた。

未知の大敵と戦うに際して、あまりに準備不足だった。

敵の戦力、性格、目的。その一切を把握しないまま戦い、敗れる。
だが、それでもー！。

「草薙さん……！」

「大丈夫だ、万里谷。ここは必ず切り抜けてみせるから、しっかりついてきてくれよ」

護堂が万里谷祐理と話している間にも死せる騎士達が殺到してくる。しかし、護堂はこの時、妙に安心感を覚えた。

(何でだ？妙に安心する)

棒立ちになつた護堂の頭上に、戦斧の一撃が振り下ろされる。

祐理が悲鳴をあげる。

しかし、それはたつた今来た人物によつて死せる騎士達が切り裂かれた。

ズバアアアアアアアアアンツツツ！！！！！！

「……………え？」

それは誰の声だったか。いきなり目の前まで肉迫していた死せる騎士達が五人、真つ二つ(…………)にされた。

カツツ

この場には似合わない足音。いや、何か着地した音だろうか。確かに誰にも響くように聞こえた音。

その方向に視線を向けると黒のライダースーツジャケットを着た、
黄金色の髪……の青年が立っていた。

「……………仁？」

静かに呼び掛けた護堂に真空は不適に笑う。

それは王を思わせる笑みだった。

護堂が他に視線を向けると動きを止めた死せる騎士達、珍しく困惑
そして恐怖の入り混じった顔をしたエリカ、驚愕した様子のヴォバ
ン侯爵、そして顔を蒼白にして何かを呟く祐理だった。

「……………な、なぜ、何故、貴方様の様な方が此処に……………ッ！」

「ふむ。今はそのような些細なことを気にしている場合ではないの
でな。

だが流石だな我オレを見ただけで何者かを理解するとは……………」

目を細め、関心したように祐理を見た真空は次に護堂に視線を向け
た。

「護堂よ。少々困っているようだったんでな。

先日の恩、返しに来たぞ」

「仁なのか？」

先日とは異なる雰囲気なので護堂は非常に困惑していた。

何より、恩という言葉に驚愕したような視線を護堂に向けるエリカと祐理が印象的だった。

何故、自分は驚愕されたような視線を向けられるのか全く理解出来なかった護堂は真空に問う。

「……………何で、仁が此処に？」

「我は一度言っただぞ。恩を返しに来たと」^{オレ}

護堂は真空の言葉を聞いて、更に困惑した。

「……………恩って、ただ昼飯奢っただけだぞ。」

そう昼飯を一食奢っただけで死地に赴いて恩を返しに来るなんて普通ではない。

では、彼は何者か？

護堂はこのことが一番気になったがその疑問もすぐに解消される。

「おお、そういえば我の^{オレ}ことを全く教えていなかったな」

真空は体全体を護堂に向けて、宣言する。

「^{オレ}私の姓は曹、名は仁、字は龍閣。四国、中の武王にして中華、初代皇帝。武を超越せし、神殺しだ」

「…曹…仁…?」

護堂の知る数少ない神話の中でも隣国、中国の話は少なからず知っている。

四国志。中、魏、呉、蜀が統べる中華四国連合国の始まりの物語である。

中華最大の英雄王、武王曹仁は呂布、関忠、高順、紀霊と共に戦線を駆けた中国最強の武将にして王である。

この程度なら学生は誰でも知っていそうだが護堂は中学時代に友人に無理矢理やらされた『真・恋姫十無双』なる格ゲーをプレイしたことがあるので大筋の物語は知っている。その中でも曹仁は使用不能のキャラで戦うことは出来るけど倒すことが不可能だったバグキヤラであった。

「おお、そういえば^{オレ}私の真名を教えていなかったな。

今この時よりお前は我が真名、真空を呼ぶことを許そう」

「あ、ああ。わかったぞ真空」

真空は満足そうに頷き、ヴォバンの方に顔を向ける。

「ふむ。護堂よ」

「何だ？」

「我は時間稼ぎはするがあ奴を倒すことはせんよ」

「はっ？何故？」

護堂は真空に疑問の声をあげるが次の真空の言葉でやっと真空が時間稼ぎしか出来ないのか理解した。

「我があ奴を倒すことも出来るがここ周辺が焦土と化すならば……」

「いや、いい。俺がどうにかする」

真空の言葉を遮り、護堂は心中で自分でヴォバンを倒すことも決意する。

「そうか。ならば行け」

「はっ？」

また護堂はマヌケな声をあげるが真空は構わずに続ける。

「お前には準備する時間が必要だろう。
故に我は時間稼ぎに徹する」

「……………ああ、わかった。

ありがとうな、真空！」

護堂は鳳の化身を行使し祐理と共に戦場から離脱する。

それと同時にエリカも戦場から離脱する。

おそらくアイコンタクトでもとつたのだろうと推測する真空。

死せる騎士達が護堂達を追うが真空は護堂達なら振り切れるだろう
と考え、あえて無視をした。

そして、再び真空はヴォバンに視線を向ける。

先程までの嘗めきつた態度ではなく最大の警戒を向けるヴォバンの
姿がそこにはあった。

「何故、貴様程の者があのような小僧を気にかける！」

「ふん。貴様のように我は孤高を気取るつもりはないんでな。

神話上に存在するありとあらゆる武具が雨のように降り注ぐ。

ギャウツ！

ヴォバンが放った猟犬は為すすべもなく武具の雨に貫かれる。

「くっ！やはり化け物か貴様はッ！」

「阿呆。貴様も人のことを言えんだろ」

真空が呆れた口調でヴォバンに言うが端から見たら両者とも化け物である。

太陽のフレアを喰らう大巨狼とあらゆる神話上の武具を所有する者。彼等が化け物で魔王でなければ人の基準は既にオカシクなっているだろう。

「調子に乗るなッ！！！」

「ほぞけッ！！！」

お互いの闘いはまだ始まったばかり……………

「いや、もう凄まじいの一言しか出ませんね」

感心したふうに呟いたのは正史編纂委員・甘粕冬馬だった。
そのそばにはリリアナ・クラニチャール、エリカ・ブランデッリが
いる。

二人は甘粕と共に最古参の王同士の闘いを盗み見ている。

「……やはり、伝説は事実だったか。

まさか、曹仁様が未だに生きているなんて……ッ！！」

「そうね。私も眉唾ものだと思っていたんだけどね」

二人の意見は最もである。

千八百年前の英雄が未だに生きているのだから……

「まあ、そろそろ護堂も準備を終えていると思うし始めましょうか。草薙護堂とデヤンスタール・ヴォバン、二人の王が相まみえる決闘の第二幕を」

そう言ったエリカはリリアナと肩を並べて歩き出した。甘粕は一人だけ残り、のんきに見送っていた。

「む？貴様は護堂の……」

「はい。貴方様の同朋たる草薙護堂の愛人しております。エリカ・ブランデッリと申します。以後お見知り置きを」

「む、ならば我も名乗ろう。

我が名は曹仁。中華四国連合国の初代皇帝だ」

優雅に自己紹介をするエリカの傍らで緊張した趣のリリアナがエリカに小声で話しかける。

（お、おいエリカ！）

（なに、リリィ？）

(だから、リリイと……んっ、今はそんなことをしている場合ではない！)

め、目の前に彼の英雄王がいらっしやるのだぞ！
何故、平然と挨拶など出来るのだ！)

(あら、淑女たる者……いえ、護堂の騎士にして愛人である私が他の神殺しに怖じ気づいたら示しがないでしょ？)

こそこそと小声で喋るエリカとリリアナ、真空は未だに迫ってくる獵犬どもに武具の雨を降らし織滅している。

「さて、そろそろ其方の娘のことを紹介してくれるかエリカ嬢」

真空は獵犬どもの織滅を続けたまま顔だけをエリカ達の方を向け、エリカの隣に居るリリアナのことを聞く。

「はい。ほら、リリイ」

「リ、リリアナ・クラニチャールと申します王よ」

「ふむ。ではリリアナ嬢でいいな」

はい！と元気よく、はつきりとした言葉で返事をしたりリアナ。リアナは四国志の物語を聞いたときから真空に一種の憧れを持っていた。

女尊男卑の世でも屈しない強き精神。基本的に女性の方が優秀な中国で女性を差し置いて最強と謳われた圧倒的な武。人を惹き付けるその魅力。（特に女性）

リアナが曹仁の逸話を語り始めるとあのエリカでさえ止めることが困難になるほど熱く語り始める。

それほどリアナは真空に憧れ、羨望、信仰の念を持っていた。

因みにリアナは中国に來日した際、真っ先に曹仁を崇める神殿で巫女達と共に祈りを捧げていた。

そんなリアナが本人と直接出逢い、会話まですることが出来た。リアナにとっては発狂ものである。

キラキラとした瞳で真空を見ているリアナに溜め息を吐き、エリカは真空に要件を伝える。

「王よ。我が主、草薙護堂の準備が整いました」

「おお、そうか。ならば、護堂が来る前にこの獵犬どもは一掃しておくでしょう」

そう言つて真空は『王の財宝』（ゲート・オブ・バビロン）から一振りの長剣を取り出した。

エリカとリアナはその長剣を見た瞬間、息を呑んだ。そのあまりにも莫大な呪力または神力を宿した剣が存在するのかと……

「天使から授けられた聖なる剣……。聖ピエールの歯、聖バジルの血、聖ドニの毛髪、聖女マリアの衣服。数々の聖遺物を納めた不滅の刃……」

「む。巫女の霊視か……
リリアナ嬢はこの剣の正体を理解したのか？」

「は、はい。その剣はデュリンダナ、デュランダーナ等の名を持つ不滅の刃。
最も知れている名はデュランダル。
最高峰の聖剣の一振りです」

リリアナの答えに満足した真空はニヤツと口元を歪めるとデュランダルを右手だけで構える。
既に雨のように降り注いだ武具は『王の財宝』（ゲート・オブ・バビロン）の中に収納し終えている。
しかし獵犬どもは何故か襲ってこない。
理由は一つ。真空が手にする聖剣だ。
聖剣の聖なるオーラに圧されているのか獵犬どもは近づいてこない。
ヴォバンも聖剣を異常に警戒している。

「くくくつ、大した才能だ。
巫女の手だけではなく努力で掴んだ力も評価出来る。
しかし自らの力の限度を知れ、決して傲ってはならん。」

さらに精進すれば素晴らしい騎士になるだろう」

真空は優しく微笑し、リリアナの頭を撫でる。

リリアナは嫌がらずに受け入れるが頬が桜色になりポォとした表情になっている。

エリカはあくあと言った表情をしている。

「ふん。クラニチャール、仇敵と一緒にいるということは王である私に逆らうということか？」

リリアナはヴォバンに話しかけられてようやくハツとした表情になり顔を取り繕う。

「んんツ……………おそれながら申し上げます。

リリアナ・クラニチャール、ただいまを以て御役をお返しさせていただきます。ただきたく思います。

か弱き婦女子の拉致に荷担するなど、騎士の道にあらず。どうかご容赦を」

リリアナの言葉を聞いた真空は面白そうに笑い、ヴォバンは真空の顔を見て不快感を露わにする。

この時、ヴォバンは通常の方法では真空に勝てないことを解っていたので不意打ちをしようと画策するが……………

「貴様の卑怯な手など我には無意味だッ！」

ザンッ！

デュランダルを一閃。

ただそれだけの動作で猟犬どもは両断され、斬撃はヴォバンまで届いた。

「ガアッ!？」

「我との闘いはここまでだ。」

貴様は今から護堂と殺り合う。

せいぜい足下すくわれぬように気をつけるんだな」

真空はエリカに視線を動かし、視線で護堂をたずねる。

エリカは頷き、息を吸い込み自身の主を呼ぶ。

「—————草薙護堂！御身の騎士が呼び招きます。

今こそ来たり、王の責務を果たし給え！」

エリカのすぐ目の前で風が渦巻く。

風を中心に、草薙護堂と巫女装束の万里谷祐理が忽然と現れた。

「待ちかねたぞ護堂！」

「悪い真空。準備に手間をかけた」

若き魔王草薙護堂、武王曹仁、老王ヴォバン。
ついに三人の神殺しがこの場に集結した。

第八話 武王と老王（後書き）

タグにリリアナの性格改変って付け足したほうがいいかな？

第九話 武王と老王 其の二（前書き）

恋姫のキャラ登場！

と言っても一人だけ何だけどね。

第九話 武王と老王 其の二

「万里谷は後ろの方で待っていてくれ。
俺のそばよりはマシだと思うから」

「はい。どうか、ご無事でー」

護堂の指示に、祐理は素直に頷いてくれた。

護堂は祐理が小走りに駆けていく先を見るとそこにはエリカともう一人。

「あれ？君はさっきの……」

「リリアナ・クラニチャールです。

今回の件ではあなたと曹仁様に義があると判断したので、曹仁様の旗下に加えていただきたく思い、馳せ参じました」

何故か曹仁を様付けにして、そのところだけ強調して言ったのが気になるが護堂はとりあえず返事をしておく。

「わかった」

返事をし終わると視線を真空に移す。
わずかに期待の眼差しを向けながら……

「^{オレ}我は協力せんぞ」

「いや、わかつてはいるんだが……」

「その代わりに^{オレ}我の眷属を一人、召喚しよう」

「……………眷属？」

不適に笑って、真空は言霊を詠唱する。

「我が元に来たれ、覇の英雄よ。
その力を我に示せ！」

コオオオツ！と光柱が真空の前に一柱顕れる。

「な、何だ！？」

護堂は狼狽するが他の者達は警戒または興味深そうに見ている。

「さあ、来い我が妻よ。我の召喚に答えよッ！……！」

カツ！と光柱が真空の言葉に答えるように光柱が一瞬にして霧散した。

しかし、光柱が収まり、消えたと同時に他の者達の視線が一ヶ所に集まる。

水色の髪に整った綺麗な顔立ち、白い浴衣を改造したような服。真紅の双叉の槍を携えた美女が不適な笑みしながら佇んでいた。

「趙雲子龍、主の呼び掛けに答え、此処に推参！」

槍を使ってポーズを決める趙雲。

全員がポカーンとした表情になる。

決まった見たいな顔をして満足そうに頷く趙雲に一番初めに立ち直った真空が話しかける。

「……………何をやっている星」

「主々久しぶりに会っておいてその反応はないんじゃないですかな？」

「阿呆、お前が変な行動するのが悪い」

少々口調が崩れる真空だが持ち前の鋼の精神ですぐに元に戻る。

「……………まあいい。」

しかし、今回は星、お前か。

華琳達は元気にしているか？」

「元気どころではないですぞ主。」

今回の召喚が一人だったためモメにモメて大変だったんですぞ」

珍しく趙雲……………星が少し不満そうな顔をして真空に愚痴る。

よほど会いに来なかったことが不満だったようだ。

真空もあまり帰っていなかったため文句も大して言えず黙ってしま
う。

「そもそも主は……………」

戦場の場で痴話喧嘩を初める二人にシリアスな空気を壊され、二人
のことをただ見ている護堂達。

「曹仁の次は趙雲ね……………」

趙雲子龍。四国志における蜀の武将。
五虎將軍の一人であり双叉の涯角槍（龍牙）を使った槍の名手でも
ある。
戦場を駆ける姿は正に戦女神と呼ばれるほど勇ましく美しいとされ
ている。

「俺の知っている知識はこのぐらいかな」

護堂は趙雲の情報を頑張って思い出し、再び趙雲を見る。

双叉の涯角槍。美しい容貌。白き着物。

確かに全部揃っている。

まつろわぬ神に匹敵するほどの英雄。

本当に彼女が協力してくれるなら確かに心強い。

「貴様等……………」

私を無視するとは死ぬ覚悟はあるのだろうか？」

真空と星の珍しい痴話喧嘩。

考えてごとをしている護堂。

オロオロしている祐理。

未だに真空に熱い眼差しを向けるリリアナ。

そしてこのカオスな状況を見て呆れるエリカ。

確かにヴォバンがキレてもおかしくはない。

というよりキレて当然だ。

「あ、忘れてた。

じゃあ、じいさん。

始めようか」

「貴様もあ奴もくだらぬことに舌を動かしすぎた。

戦死たる者が、敵と対したときに為す振る舞いではないな。

未熟者め」

護堂と真空を見て毒を吐く老人を、護堂はふてぶてしく睨みつける。真空の方は気にしていないようだが星は自らが愛し、忠誠を誓っている主をバカにされるのが気に入らなかつたのかヴォバンを鋭い眼光で睨みつけている。

「……………御老人。少し口がすぎるのではないですか？」

「ふん。娘。貴様こそ口を慎め。

英雄といつてもただの人、私と相対しても数分ともたんだらう」

「ふつ、御老人。

あまり私をなめないでもらいたい。

一時期とはいえ、英雄として讃えられたこの身。

今からその実力の一端を御覧にいれましょう」

ヴォバンの挑発にのらず、クールに対応する星は静かに槍を構える。

「よく吠える。ならば、実力の方はどうだ！」

ヴォバンが腕を振り下ろす。

すると、背後で控えていた死せる騎士達が一斉に動き出した。

「少年ッ！！！」

「は、はい！」

「君は御老人を倒すことだけに集中しろ。

騎士達は私が相手する！」

護堂にそう言つと星は手近にいた死せる騎士を一人、槍で切り裂いた。

「曹龍閣に仕える忠臣が一人、趙子龍いざ参るッ！！！」

宣言と共に星は人とは思えない跳躍力で飛び、死せる騎士達が群が

る中心に着地し物凄い速さの突きで眼前にいる死せる騎士達を塵に戻す。

「ハアツ!!!」

掛け声と共に横に一閃。

すぐ近くまで迫っていた死せる騎士達を一気に切り裂いた。しかし、切り裂いても死せる騎士達は一考に減らない。

八割の死せる騎士達は星が引きつけているのだ。それは当然だろうがそれでもやはり数が少々多い。

しかしこの程度で根をあげる星ではない。群雄割拠の時代に数多くの賊を葬り、戦地を蹂躪した英雄の一人。

赤壁の戦い後、真空に更に鍛えられ『真眼』にも目覚めた武将の一人である。

この程度の者達に遅れをとるならば、真空に顔向けが出来ない。頭の中でそのことを考えながら槍を振り続ける。

「ん?」

急に死せる騎士達の動きが整然とし出したため、星は相手の攻撃を見極め、華麗に避けながら周りに視線を巡らせる。

「なるほど、そういうことか」

視線を巡らせていると先ほどまで大巨狼だった老人は人の姿へと体型を元に戻していた。
そして、護堂がヴォバンに向かって疾駆し光り輝く黄金の剣で切りかかるようにする。
星と戦っていた死せる騎士達の一部がヴォバンを守りに星から離れてしまった。

（好機！）

星は自分の得物（龍牙）に気を纏わせ上段から振り下ろす。

ズバアアアアアアアアアンンンツツツ！！！！！！

巨大な気の斬激が死せる騎士の大半を切り裂いた。
そして、跳躍し護堂達の元に着地する。

「立ち上がれ少年。」

私と主の期待に答えてみせよ！！」

「……声が聞こえる。祐理、エリカ、リリアナ、そして趙雲さん。みんなまだ無事のようだ。」

しかしそれだけではない。他にも声が聞こえる。群衆の声。力を求める声。救済を求める声。

護堂は顔を上げて、周囲を見渡した。その瞬間に、理解した。

力の存在を確信する。自らが得た、新たな化身の性質を把握する。

「義なる者達の守護者を、我は招き奉る。」

義なる者達の守護者を、我を讃え、願い奉る。

天を支え、大地を広げる者よ。

勝利を与え、恩寵を与える者達よ。

義なる我に、正しき路と光明を示し給え！」

護堂は闘志をバネにして立ち上がり、言霊を発した。

第九話 武王と老王 其の二（後書き）

ん、うまく文章がまとまらない。

スランプ気味の今日この頃。

第十話 武王と老王 其の三(前書き)

オリ設定あり

PS3を買おうか悩んでいるけど、どうしようかな

第十話 武王と老王 其の三

立ち上がった護堂は新たに掌握した化身「――第九の化身『山羊』の言霊を発し、『戦士』から『山羊』へと変える。その瞬間に、ヴォバンが稲妻を放った。だが護堂は、それを“受け止め”、それを“投げ返した”。

「――何？」

老王は直撃するはずの稲妻は、轟音と共に彼の脇へと逸れ、駆け抜けていった。

「それも貴様の力か、小僧！
まだ戦う力を残しておったとはな……！」

闘争の喜悦で、ヴォバンの表情が輝きを放つ。
護堂は無言で頷いた。

ザッ！

解き放たれた眷属は白銀色の瞳を飛来する雷に向け、手に携えていた大剣を片手で構える。

カッ！

飛来した雷が分散して鷹の形を型どり真空達に襲い掛かる。

だが今回、解き放った眷属は実力が違う。

大剣を左方から右方に一閃。

ただそれだけの動作で雷の鷹は全て切り裂かれた。

この時になってようやくヴォバンや護堂達のが此方に視線を向ける。

視線は先ほどの雷の鷹を切り裂いた女性に注がれる。

純白の髪に猫を思わせる整った容姿。

白色のスカーフにチャイナ服を実戦向けにした感じの服。

何よりその手に携える大剣が圧倒的な存在感を醸し出していた。

「ふふふっ、ついにボクのことを頼ってくれたね真空！」

純白の髪の女性……………紀霊が笑顔で真空に言う。

紀霊は大剣を肩に背負い、真空に近づく。

「ん〜でもね。真空。頼ってくれるの嬉しいけどもっとな手応えのある敵はいないの？」

紀霊がヴォバンを見ながら言う。

しかし、真空は空を見上げたまま紀霊に呟く。

「お前が満足するかはわからんが手応えはありそうだぞ？」

紀霊は真空の目線を追って、視線を空に向けると納得したように頷く。

空には無数の雷で構築された狼と鷹。

このような芸道、カンピオーネかまつろわぬ神にしか出来ない。だが現在カンピオーネで雷の獣を創る権能を所持する者はいない。そのことを考えるとこれはまつろわぬ神の仕業と考えて間違いないだろう。

「星よ。お前はどつする？」

お前も共に来るか？」

「愚問ですぞ主。

――私達は主の矛にして盾。主がどんな悪逆非道に走っても死の

果てまでついていく忠実な従僕。
主に愛と忠誠を誓ったその時から我等は主のもの——」

星は一句一句噛まずに全て言い切った。

それはただの言葉ではない。

忠臣は全員が同じ気持ちだろうと星達が過去に言った忠誠の聖句。

忠実なる曹仁の騎士達が忠義の儀に用いる絶対遵守の言霊。

星は言霊は発したことにより真空に仇なす者を葬り去れ、切り裂いてしまえと本能が星に呼びかける。

「ふふふつ、では参ろうか。主」

万人が見惚れる笑みをこぼすと星は雷の獣達に顔を向ける。

「では白よ。お前にも命ずる。

我に仇^{オレ}なす者を葬り去れ」

「はっ！

——私達は主の矛にして盾。主がどんな悪逆非道に走っても死の果てまでついていく忠実な従僕。

主に愛と忠誠を誓ったその時から我等は主のもの——」

言霊を発すると紀霊………白も本能に従い、雷の獣達に顔を向ける。

「葬り去れ、我に仇なす者を。
斬り裂け、憎き怨敵を。」

滅せよ、我が王道に横槍を入れる愚者を！」

それは自分の従僕達に使う言霊。

第三の権能『死を否定せし者』で不老不死の呪縛を受けた眷属達に贈る闘争の聖句。

「ふふふつ、力が漲ってきましたぞ主！」

「アハハハハハハッ！」

敵はみんな殺してもいいんだよね！」

闘争の言霊で二人の本能を解放させることで超人的な身体能力をさらに上げ、気を使った戦闘術、気術の使用効力を上げる。

「——気術とは真空がまだ力を完全に扱い切れなかった頃、接近戦において即座に有効打をあたえる為に自然エネルギーである気を用いて編み出し技術である。」

気術は呪術とは違い、完全に接近戦に特化した能力である。しかし、接近戦だけといってもその効力は絶大である。

呪術以上の身体能力の強化、気を纏わせた腕を振るえば巨大な岩をも砕く打撃力等。何より特徴的なのが空中でも戦闘が可能なこと。

使い手しいでは気を空気に干渉させ一時的に足場を創ることすら

可能になる。

だが二流の実力者でも空中に足場を数秒維持させ、さらに跳ぶことが可能と気術の使い手で弱者は非常に少ない。

「さあ、全て蹴散らせ！」

真空の号令と共に二人が勢いよく跳び出した。

第十話 武王と老王 其三（後書き）

はい、オリ設定の気術です。

羅濠教主が気を使っていたので作ってみた設定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2084w/>

カンピオーネ！～王道を進みし鋼の武王～

2011年11月19日13時00分発行